



JL 4  
3541  
5



播磨名所巡覽圖會卷之五目錄

龍神鎮城 <small>（成宮一社 寺院土寺）</small>	龍吹川	三社明神	城山城址
小柳湫水	小津	梶山城址	行崎驛
栗原津祠	袋尾津祠	南天燭火樹	赤松則勝墓
疾比良津社	中津寺	平舟保昌墓	令割山城址
龍門寺	空栗川	逆水湫	園融寺
修津の浦	城山	大光寺	門崎
下が湫	池の湫	正殿 別雷堂 拜堂 行同社 古田社 本社 若宮社 八幡宮 荒津 狹尾社 柳尾社	小泉月津寺
室津	室明津	見附寺	津名寺
岩津社 二層塔 石合社 龍津社 白松社 津渡	天王祠	正法寺	津運寺 古石墓
津宮寺 蓮跡	大雲寺		

聖十六年一月十一日  
尼野貴美氏贈

大聖寺	觀音寺	寂靜寺	德宗寺
不二庵	法釋院	街茶屋	多若大倍送跡
尾登浦	竹園尾	陀羅尼溪	柏浦
漱戸 <small>全修 寺</small>	龍籠堂	瓦川水	向灘
唐荷崎	那波城趾	陰村	那波 <small>日浦 日文修</small>
得宗寺	坂城浦	德業寺	相眼寺
高道峯	大避明津	龜乃甲	尾崎八藏宮
妙見	常樂寺	日製	作和都法雲社
觀音寺	赤穂燈籠	中村	瓶川
新渡村	唐弘崎	忠義塚 日輝法	遠林寺
赤穂鎮城	花岳寺		

大石屋敷法	西塩溪	大津	愛宕大権現
長樂寺	西山寺	尾子懸	若狭社
和泉式部宮本	菅浦香塚	八保津社	高峯牛臥天王
津渡寺	文州川	有年驛	有年城跡
遍照院跡	又百羅漢	矢野里	觀音寺
三本牟都婆	小鷹山	小鷹石	無燄山
法雲寺	宝林寺	光明山城法	感狀山城法
鞍掛津社	白旗山古城	苔繩古城	僧惠法古法
大聖寺城法	舟坂山	倭後三郎墓	

播磨名所巡覽圖會卷之五

龍野鎧城

服坂度乃

新田義貞始て當國一國

國二編み義貞之びて

足利家より赤松則祐と編み満祐弒送乃後ハ國を以て

後赤松政則と編み延徳年中當城を構へ猶子政村と編み後乃

城を譲る足當城乃始て○飲内ハ楯東楯西飾西三郡に跨る

莊廿一郷凡百五十一邑東ハ播磨西ハ那波野小丸丸とあり小丸

香山聖岩と限り南ハ網子新在家東西凡三里余南北又里余

竈敷軒許寺院十二ヶ寺氏宮一社別當正覺院

右の驛道ハ小丸ありて龍野の水路後山下より書字坂中よりあり龍野西郡を以て

大市御相違中村のろ城とあり今ハ常村とあり夜比良の路とあり一布施とあり

小丸丸光明山乃下より有田地蔵とあり舟橋とあり山陽道これ今ハ道中とあり

又赤松勢取坂とあり新田義貞先陣江田大銀寺とあり船津とあり今ハ船津とあり

○云産 鱧 Eロコ 辛大根 海鹽 山椒 栗 杉 砥石

燧石 厚紙 烟葉入 岩池

龍野川

法隆の系

川上ハ定東郡と流と  
合せし外中流と  
論は遠江細江あり



○臺山といふ今の窟乃山なり

三社明神

小山あり麓靈神といひいへり  
小津村あり文明三年靈神

城山城趾

平舟郷中内村あり赤松即倭祿守義雅の居城之跡け城は山谷にあり  
南小津村あり遠渡の教百里も眼下に遠り赤松は保保川の大河あり細川山名乃西勢  
五万余騎を以て嚴密美々たる道に赤松元年九月十日城山の城一斤の堀あり赤松は及ぶ  
赤松元年より應仁元年と七年の赤松家中絶たけ同赤松山名家全の城あり

小柳清水

平舟郷清水村あり  
接摩十水の其一なり

小津

小室郷小津村あり接摩の所之万年  
長者の宅地あり今屋上と書け

握山城趾

河内赤松内村あり谷汲甲斐を即國氏  
是と守り赤松年中赤松政村是と書け

行島驛

赤松年中赤松政村あり驛あり  
是と守り赤松年中赤松政村是と書け

赤原神祠

川の辺

代衣尻神祠

代衣尻

南天燭文樹

川の辺代衣尻乃赤松は  
希代の文樹なり

赤松則勝墓

川の辺中陣跡墓あり赤松は  
元久の居城之跡山城跡と記せ

夜比良神社

赤松年中赤松政村あり  
今八段と書川の辺

麻谷山中島寺

石見赤松  
赤松年中赤松政村あり

平舟保昌墓

赤松年中赤松政村あり  
老後よけ地一畝あり

令剛山城趾

赤松政則の居城と記せ  
赤松年中赤松政村あり

演

天徳山龍門寺

細川赤松  
赤松年中赤松政村あり

開基 盤珪和尚伽藍大地

盤珪佛智禪師は攝州揖西郡淡田郷の僧にて元和八年三月の降

誕ん七八歳の比より万人は勝也村民皆富家の津屋と流凡十歳  
て父乃憂又丁ひ十二歳して大智明德乃論を講け國人皆感  
ぬ日郷西方寺入て不勅明王は祈祝して日國赤徳隆臨禪師  
乃法流雲南祥和尚の弟子とありて出家しぬ後弟子は日百人  
あり諸國又廢せし寺院を祀とす其教五十余ヶ不元祿六年  
九月遷化は年七十二歳元文五年又十年又たより大法正眼國  
師と讃あり

○盤珪法流と印板あり世は是と書け又書けふとて雨乞乃致と書け  
の意をこゝろ白挽致と制し教へ流の歸らしめ又須臾やて雨乞  
とつり今且例としてうへとらん  
攝州揖保郡淡田村不徳庵の同基貞嗣後志のり禪師のり印板の記  
優り印板はすく一多あり入は其りくともも印板のり印板はすく一多あり  
け方何のり居はすく印板のり印板はすく一多あり  
度存はすく其心と書け其心と書け其心と書け其心と書け其心と書け  
すい存はすく其心と書け其心と書け其心と書け其心と書け其心と書け



天徳山龍門寺

此山を千原ヶりし和尚今乃

てく建立其を金再建の赤松

一族其赤松三郎光則が

とよつら墓に 岡山堂の

境内のそくあり幽閑の

地有り元禄中

徳勢あり徳衆ハ

多餘人其云乃

可い佛智弘法授所

と稱し希代の

又徳と深つ

が



多岐川

源流は金沢の  
多岐川と云ふ  
と云ふなり

獅子岩

七曲の中より  
獅子岩と云ふ  
岩あり

炭焼谷

七曲の中より  
炭焼谷と云ふ  
谷あり

とらり石

大石群は  
とらり石と云ふ  
石あり



七曲

七曲の中より  
七曲と云ふ  
曲あり

七曲の中より  
七曲と云ふ  
曲あり

山伏山

山伏の山  
山伏と云ふ  
山あり

新口

地獄谷

七曲の中より  
地獄谷と云ふ  
谷あり





室津

門崎

麻山半つきの橋より  
右に門崎の港

すれぬのまき、あ  
手ゆい福とむ  
うふて橋と敷  
手んがゆひは  
伊波浦へつる  
ゆきふれ



油の濱

下り濱

室津の港より  
室津の港に  
本を代下し  
再りるる  
油の濱  
昔地ありしを  
又西海より  
名産入はの  
まに西海の  
まに西海の  
のまに西海の  
油の濱  
油の濱  
油の濱



室津

室津の泊 室乃浦 尚津の檣州の一都會なりて西國大名参

勅社素乃志岸と定り又系松乃津とも定む帝畿と云るに十  
二里山の三面を震て江灣の一方は海に上り百里美景と觀るに  
泊松の池中は松ぶがごとく猿客の波上は枕と安んじ峯は雄美の  
弁と郷清し山岸には花女の系竹は媚き國守の願う海士乃網を潜  
せ漁り美妙若樂寤窮覽の界あり。室とは人の居室のり之をよけ  
江のままにこりたるふたてり。舊傳曰昔代のむじは津且  
夏蔓紫花して暗疾乃ごとく道治も見へるごとく。やは加茂別雷

昨日向國高千穂峯よりけみ敷向く夏蔓を依拂ひ移しと始  
として今の紫陽みひりて西海村素乃客松風波と津と要津  
とあり高藤唐土乃倭客商人の交易ありと津は繁盛なりとい  
るを又大明の金華縣と傳へて金華津とも号する  
むろの浦乃せと此修なる時修の破は波はぬきと云ふも  
山のてふがてりせぬ夜は室の海はつらまひりといふに於て人

此余秋後これを暇に賞みて佐用記にこれ津のりを云  
公任卿朗詠集曰若菜乃雅園防守とめて下向り附け地の風景と見

曉入長松之洞 巖泉咽号 嶺猿吟

夜宿松浦之波 青嵐吹号 皓月白

義滿嚴治清池曰  
年の附くはに「程」又室の海はつらまひりといふに於て人  
たり中睡け社に加茂のともりやよこのとまり乃社かりしその津よりまけあせ  
て街去りしはくは社に六まきやてりひつかりたる敷うらてまきく津並  
とも集りておびやうとれり津のりのかど雨風乃煙るさとの津のりといふと  
そきこゆる重まけんの津らういも押ひくけぬのりかきよれたの世く  
そぞろゆる云

室明神社 室の神明山あり 正殿に加茂別雷皇古神宮東行 社を田

社西に芝布祢社若宮之古田乃東に枝尾社正殿の後に河合社中務

御祖社之其西に權殿之二層塔は多宝佛と奉まつる 八幡宮塔の西 棚尾祠 岩本橋本河根田

祠 若宮祠尾 白登社 多層の 禮樓 中務神宮之古田乃東に枝尾社正殿の後に河合社中務

神傳曰抑當社は乃河津日向國高木穗峯二上山嶽より洛山二葉山へ

遷らせ給ふ其附け地は須臾畜通し給ひ厥后加茂光徳乃附

祢藏三十六人奉侍と云ひ傳へり乃後昔を代拂ひ湊と聞き

給ひ奇神禱の三刀をも奉仕の神と崇めし 例祭小五月ありと稱し是加茂競馬の神なり準と云ふその

附當社は乃神王上加茂七家の内を居大踏氏都より下向きて後

所は後々舊例の祭式あり 日ハ遠道の浦人橋麻乃て其日の賑ひまらん方は町中より家宅

を飾り二門和因乃来宮泊船の縁人宴集ひかくし群り一津

今ぬぬは日祭日後九十日津の家々の業を停て祭式の調度の

とみ置たり皇都の葵津彦みつきと收羅する祭式あり

天王河 明神あり赤坂の林間あり赤津平次天正六月七日は華治の祇園合二準にて

佛通山見性寺 室津あり授意あり 佛心の方より佛心あり 浄名寺 本より聖観音あり 大雲寺 本より聖観音あり 正洞院 大雲而余あり 右乃尺ヶ石皆室君建立の寺なり

清涼山津還寺 友君墓 因光大師所縁御敷 御代天明寺 大聖寺 觀音寺 寂靜寺 徳意寺 不二庵 法釋院 御茶屋 姫府侯の別荘なり



画竹  
 虎橋  
 雲橋  
 八橋  
 校舎  
 奉納  
 と  
 と



室明津  
 尚江信まの什宝  
 源光朝之所刊  
 寄附状  
 社名として下橋  
 の御内按志林  
 田室御厨上  
 三ノの辰文法二  
 奉九月十八日の  
 寄附状之其外  
 歴代御軍をの所教書  
 判物等教通あり  
 平重彬御琵琶  
 表の方器本表紅  
 花梨天板滝兼  
 面画の雲の内裏の



右法  
 眼の  
 画馬  
 津馬の  
 仕丁二人  
 づとね  
 終に大  
 先信を  
 舟に  
 弥延長  
 之家と書



新拾遺  
 室の  
 朝用  
 舟人  
 大に

小阜月祭禮

祭禮の神楽  
は神楽蓋と  
けりし地尾  
西のけりし  
二人マニ  
つらり神の  
さうまひ  
三帳子  
もつして  
の秋と派  
御前  
の神一人  
一人の金  
と指げ  
又天冠  
水于  
と十二



神楽の神  
をのく  
女と  
ら  
知  
神と  
の神  
本の  
を仕  
を推  
て信  
多  
十人  
を刀  
祭を  
神加  
大









藤花院准后義満公履修清記云 周防國ひろとことりふ石にあり  
 ぬいじけ身の善賢のまか押がまんところひたる人其若くも  
 こそ生身の善賢よとくけるのたふゆ押へたるをせしむのさ  
 ま滋し面白し若とましく切られてまひへつる峯三ツにツ並びつ  
 松拍ひろるととと源山本若抄ひさぐりて後雲うとくくまなり  
 〇今案撰集抄は室とのひされとも江渡抄より同法よ付て津路とて人あり  
 又院抄抄はははとつり又撰集抄のた女の歌よまは周防の室狭文  
 又義満の元よも室狭之室狭も即松若とてた女あり善賢堂あり亦  
 江口よ若堂とつを建て善賢を安楽の 村室上人善賢と見らる若と  
 しの安楽よ疑ひなしとつへも退きてもととよま下よまうりしひれもあま  
 其流い若た女自拍子の名と付らるるひうのてくれやと「きりのよはあ」次既り  
 法盛の巻せし 自拍子よ佛。祇王。祇女又乳守の傾城は地獄又朝野群  
 載よ若のた女の名は出せしよ 親善。小親善。文殊。善種。うとくまうさる  
 室よも善賢とてつ傾城のありしと人の戯と教へしを時堂に記する心より  
 尾屋浦 尾屋浦のつきこた女若小舟としてかゆは法光上人の教記と記し之即尾とゆ  
尾屋浦のつきこた女若小舟としてかゆは法光上人の教記と記し之即尾とゆ

竹園尼 白灘の中より中女のたむ碓礮中絶言釈基御よらた  
 播磨園竹の園とつふに房と繕ぐ又もた女のつるまひるし  
 ざりろつとつや或時中絶言の内の人乃取みのりて西園より都とま  
 外ろつる伝何ひ見と發と切て陰奥紙と打包てかく書とる  
 是れもせぬうたをららるるよ はなはまのまゆりては神ぞうらぬ 竹園尼  
 陀羅尼濱 竹園ありけ房を繕てあまみ手 陀羅尼と痛しとらうけ名ありけ房  
運いしつりけ所を 柏浦 島津西南の入口ありけり 是もそのぬ柏の  
今佛修とつる 今寄 此所は室の入口にてけり 波ありは波をよむの山崎  
其南に登房其西を眺るらひてはもよる名なり  
 室の浦の端門の傍なる鳴鶴の破れ波ぬぬたつる  
 花川水 室より西一里あり 室より西一里あり 向灘 室より西一里あり 室より西一里あり  
 唐荷池 室より西一里あり 室より西一里あり  
内抄よとつ所の唐荷池の唐荷とて三ツの池ありと記しは地の上と記し  
むろりよ登波迎とつる若とつ干波ははりつる波ははりつる御春の通波ははりつる

ていねいのり上げ破るる事... 玉藻のりかしの海... 赤穂

燈籠堂

陸村 西園説る赤穂城

那波 那波浦 那波大嶋

得宗寺

那波城跡

江林山徳業寺

温泉山慈眼寺

高運峯

板城浦

日湊

日泊

生島

一名いさみ島 板城浦に在り 衆村惣領といへども若くは...

五景系花番本悉く満て即大酒明津の旅を以て...

見ゆる海よりいちうて二丁許津中を接たりて...

是がふる浦人乃安居とある溪と海とをり同い...

づり又小島名若鳥といふあり

福島

板城の海にあり 細川両家の程あり

津石

板城とまの十間をわたり 若二ツ

小倉町

板城をわたり一又又す丹けりて海と三島津...

大避明津

赤穂藩の靈之と云ふ

赤山蔵昔押のり人々を推古女帝の御堂...

下



五

坂之  
城



五十八

六

○宗心先と群臣を拜せしめて河勝は授け給へ河勝降國寺と造立  
て先を委たり 降國寺大秦 廣隆寺 皇極三年又東國富士川乃邊より大生部  
多との者異衆を養ひて常世の神と号け信どる者材室に  
まうけらるゝ郷里の人を遊怒に河勝先と惡みて大生部と捕へて  
妖術を礼明と 礼 日本 又天祚地祇を多りて安國利民の政と布き  
又六十番乃舞樂の面を制音律糸竹の術を傳ふる河勝  
より始むと云り ○津名帳葛野郡大酒の津はこれ大秦也

○又大國入鹿乃羅と河勝の邊より大酒の津はこれ大秦也  
始むに仁德帝は使ひし百海の酒若るれ其始むを大酒と記し  
るより此大の御は日トキ上古の号は百海の人けあまりし國史  
より云々 既又傍惠後百海より来り夫の奥より古流あり ○酒若り  
始めて蟹と飼ひ給と織て軟其給を服用より小甚衆より其膚の  
よまきとくハタの姓と揚ふは又秦とばハタとはよりりくはるる日本  
又押ひく大切ある人なりが云ひて非し記るも此の方り尚後考あるべし  
○續日本紀和初三年七月攝摩國始織後神云

○三代實攝 德和天皇貞觀六年八月攝摩國赤德郡の大外正七位下  
秦造内麻呂飯又叙して後又後と云 舊傳は出郡の上代秦川勝乃  
赤地方より入麻呂種と遷て又其衆一附く夫の山中又獵し  
三年赤都波の故よりあり又郡中又又大邊明作して祀るも皆け  
と云り 後世記流るく國史より云々 此の方り尚後考あるべし  
河勝の子孫なりと云るが尚其子孫或は家属も多るべし 本津村河  
勝僕後乃子孫と云るを考へり

備後三郎高德墓 山より 延元元年足利氏九州より攻登りし時  
脇屋義成攝摩(引込)に兜傳後守範長子息三郎高德と三  
石の南乃山を撰くことこの備(山)服屋殿は退付んとせし 高德  
されの軍は麻呂と世多り相知り傳小預け長き候邊と云るは  
赤松が兵路と遷てこれ討やぶり郡波より阿弥院が名と云十八  
度戦ひて後六勝は討たされは過堂に入し 範長自害し 赤松  
が勢の大勢を孫左衛門次郎重氏と云る者葬れして遠背と故郷へ

親 觀 寺  
妙見山



大 避 明 神

坂城の青雲林と  
紅場より二丁  
とよりゆけを  
境内方八丁宮の左  
方の丘の跡を後系  
傍より別當あり  
室津山妙見寺といふ  
まゝまゝの基の  
開基場中  
十六坊天心  
院を  
院を



備後三郎  
高德



送りしものとらん 備後三郎高德の墓と云ふ  
 ○高德が新田義貞に属して佐藤の  
 國へ被りたるが義貞死去の後備後國へ去り思召は深き居て尚  
 日本を違せしめし新田義治と喚なり諸國を又回文をきし  
 て拓き集めたり又強し是より久しうのききし氏は渡して遠く  
 とあり至生の遠くは切腹の若衆してこれを以て餘黨の若衆に  
 になりたるは高德が支度お違して義治と友に信濃へあゆみ  
 別發して志純と号し其後高德が終る不と云ふ也

○武傷近年討敵をうけいひふに平二十二年六月十三日と創む正平の年別之は

雲谷山常樂寺 板敷の宮

龜乃甲 赤徳の城下のとくうりの川は石をきて通ぬ其の秋は龜の甲の甲ふり切なり

尾崎八幡宮 板敷の南尾崎村にあり別當天を宗令先山本宮寺長十年壘水守花門

新濱村 尾崎の尾にあり是城の内匠攻むの附海と理して築石は高松雅と防んが

大和丸入る大和丸と比せしして和知と尚葉舟的形の人を樹て陸と陸しは

赤徳垣

日割

此二畝の石小垣ありて... 地内其後... 潮を引入る... 潮を引入る... 潮を引入る...

御寄伊和都比賣神法

方り流籠其度と... 潮を引入る... 潮を引入る... 潮を引入る...

唐

唐記... 潮を引入る... 潮を引入る... 潮を引入る...



釜 煨







尾崎八幡

尾崎川 中村は流れて城下と成り

中村 城下の西へ尾崎川より入川理と二丁目其邊にあり三丁目 中村 城下の入口の川をり流る

赤穂 赤穂の南より流れておと川と成り西へ流るこんきつ川なり 赤穂 赤穂の南より流れておと川と成り西へ流るこんきつ川なり

を附属以其附よりして此城を築く慶長八年池田輝政一統の

後姫路より郡代あり河内守日政綱目輝貞其後清村内匠

其後永安家其後森家○城内庄の五ヶ郷の二郷村教都て九

十六邑城下の所甚多買しては民物と並べて功用足るるなり

赤穂街の邊より海道といひ昔の周世坂と城にまで百日程と距離あり

後田家か上月城(加勢)の人教三ツ石か坂坂よまのり赤穂を拒とす  
道と通るるが不能成候と終て城を築りしといひ小治坂の同道なり

墓山 華岳寺 和洋和尚曹洞宗 法隆寺 法隆寺 法隆寺 法隆寺

左右大石内苑女親子其外に十八人の義士の石塔並を建てて江府泉岳寺に  
ありし忠義塚の序辭を奉て銘文の思と

忠義塚序

元禄十五年十二月十四日。故内匠頭浅野長矩朝臣。臣大石良雄等。四十  
六人相與謀為其君報讐。夜襲殺吉良義英朝臣。束身歸官。官分拘各處。三  
年。議成。越二月四日。有命。遂賜自裁。云今不具其事。蓋假自祖考三世得君  
赤穂恩惠之洽。巨民一體遺愛之深。其事且五十年。語一至此。猶涕泣。然泣  
下。近年。府臣某為之。管諸君墓於城北花嶽寺中。刻石表焉。民莫不悅。今  
茲春三月。遂重伐巨石立碑於墓道之東。屬廉為辭。夫諸君之烈。譬如日月  
之麗天。萬世罔隊。初不假人言。與彫刻。然非此無以慰思焉。則不有斯舉。又  
將為何如。廉也。郡人不可辭。謹為之銘。 銘畧之

寛延三年庚午三月十四日 郡人 奥藤利栄 松本善宣 柴原被  
長 奥藤利微 田淵春元 柳田吉甫 等建

関云

のけは忠義のいふ平埔号と無湯とて文徳のたれ一先せん其墓を  
も多くありし世に流布せし人の知るがれ赤穂農業家の子とて



五ノ年六

かうりやん勝人な稱せらるる收事より東涯先生の門人となり其學を受  
 學ありて後龍中服坂慶勝應之庵儒官と云今又其子孫あり。先生  
 士三の時折く大石の館又出入り内務女其女と云「後子は一人名  
 んと稱あり春日侍中慶一推奉し抑希て經義一二章と講べし其  
 辨理明く之れが内務女も大石小教ひ家た連たり飲食志とく引出物  
 々々内務女幼少の時指針を紋付の刀と稱し之れ其刀今又其家  
 傳いまり。〇〇〇於不嫁もあり又此府の文人之青以て語を乞ふる也

**明王山遠林寺** 滅山和尚の閑基なり 淨宗智積院末之齋の池回家の善  
 提不動の養母号玄興寺と云り玄興の輝政乃法号なり又息二三人の位  
 牌あり法住家にて改号して新殿不とありて今又志より 後隆啓寺  
 又位牌を移し

**大石屋鋪跡** 今明命ききやて門ひむりのき跡より荒池と豐浦の  
 西塩濱 甚廣し。塩の海中より小徳あり 大津 入り入海の津之今塩濱と云  
**愛宕石大権現** 山中村あり古言宗遠林寺末岡山寺如勝軍地赤大即坊二名の赤  
 本と云て赤根の法号と云正保年中又近き正地法時若の命ありて後

**長樂寺** 郭の權攝以其正地之教より七連まは即正地と稱ひし河ありき後  
 砂子村あり天名宗遠林寺西百十間  
 南北七十間并龜年中是訓の基

**尼子山西山寺** 希 尼子墓 後市町あり墓は境内あり墓中  
 高野陣心寺末岡基の基

**若狭野** 奥渡慈恩寺村あり 和泉郡部のむと小式部と稱し不足と云俗傳ありとも  
 出石澤かみは左の墓に記され又小式部と云りいふ家史ありとも

**和泉式部宿本** 雨内村 此若佐地又菅栗の本あり星宿の云着けこころ  
 本林五郎ちまゝの者あり京都より小式部と拾ひ入りしと和泉式  
 部家又同のきておしし時雨のくはは栗の樹のむら合りて

之は乃同よものうりく易ぬと今に秋ののりひは

此秋を今難く出て教ふは此と云りるふは秋の魂と云ては物活すと云へ出せり  
 かしは神物活の別と云ふやははははは和泉式部書山樹室上人よと云りし  
 秋の拾遺集に云りされは和泉式部書山樹室上人よと云りし  
 此和泉式部小式部とも又上東門院と云はして流のゆも赤安のし南考ふと

**菅浦茶屋** 西山村岳山あり星宿の宿舎の宿の宿早を菅浦茶と云へし  
 末り、張と云てはと違ふと云又その宿は高田岳山村あり又和泉郡と云はる  
 此地と云ては政村結村の名史代の宿あり又まは高松山長明寺と云はる

○砂石集云 故郷倉右左衛門尉家公より昔浦若とりて...  
見し者も其を十人集亦せりて...  
たれば見まきりて

八保津社

安室谷園村梵天宮にて津名根の古社云元禄年中今の  
らまは後以細干於門寺の傍社記を傳へり

高峯半次天王

安室の取山里村にありける山之麓安三年中官拜殿再營慶峯の洪日  
未社多し西天王と稱れ其うと歎て嵐の荒る候いの

高雄山津渡寺

因世村にあり爾基文記明應三年正月十六日祝之長業と記れ秘道映若書一通  
あり其奥を去り山と水島の所あり大なる窟を窟と云を去り

千草川

まま御の名り宛栗郎にありて大河の源り宛栗郎取崩山より旧里中より湯若より出  
て依用と經上州川終見川とらふ赤坂郡城下の邊りていづれ川中村川の右あり川を  
右より遠り流あり今この川筋とありて溪市砂子の在候と云わす中村の車と西に巡り  
野岩の下よりありて修りて中村にあり海に入溪市砂子と右川の流あり

有年驛

行路より變り次きて  
俗名三ノ久あり

有年城址

有年村にあり赤松信隆守則資三男  
が郷津部と云れこれ居候

六道山遍照院蹟

有年より大坂の間に在り  
横山より入る其後あり

爾基赤洋礎

多き砂より山上

大小の五輪の塔其數とありは又石を聚んで窟の如くあり物あり  
塔が窟と入り其傍に三日月斗なる老女火窟と稱り石を刻む

四ノ三ノ

あり道素條の村民の家は花江と入り又西有年村大園寺又  
小鈴つり大日二年六道山遍照院と云ふ文字あり是澤光明と  
時代を月より入

五百羅漢

安室の村にあり石像あり悉く散失を今あるは釈迦文殊普賢如來論觀  
十二羅漢合せて廿羅あり惟若未詳數多きを今て五百羅漢とい

三野山親音寺

安室の村にあり  
後山西麓二の山

三本率都婆

安室の村にあり  
後山西麓二の山

無礙山

小倉山の南にあり一山は内山と云ふ

今華山法雲寺

若繩村にあり延元元年赤松園心建立爾山赤松園心後陣香村和尙  
峯相記三層進年中安海經堂爾山信養の附法園より万人群と云

赤松山寶松寺

赤松の莊河村にあり  
赤松の莊河村にあり

赤松山寶松寺

赤松の莊河村にあり  
赤松の莊河村にあり

赤松山寶松寺

赤松の莊河村にあり  
赤松の莊河村にあり

赤松山寶松寺

赤松の莊河村にあり  
赤松の莊河村にあり

赤松山寶松寺

赤松の莊河村にあり  
赤松の莊河村にあり

赤松山寶松寺

赤松の莊河村にあり  
赤松の莊河村にあり

赤松山寶松寺

赤松の莊河村にあり  
赤松の莊河村にあり

赤松山寶松寺

赤松の莊河村にあり  
赤松の莊河村にあり

女子安尼の儀あり又別法和尚の儀  
寺論會通所載書村上家の古  
書秘傳甲書より  
傳曰國心別法和尚又問曰法二法は  
とはや和尚言て曰松よ古今のまは  
降後守りたり家系ふるよ及して守り持てる  
後言傳中真しく山をのりて

交野光明山跡跡  
赤松下野守政秀傳れ入りしるよ  
藤原朝の人の政秀傳後跡跡

感快山跡跡  
夫や居あり建武三年義貞白旗の跡と改る別跡跡  
跡跡て我切あり其後國變を守居れ又赤松村政村居れ

發居池社  
發居村あり  
式内の子社あり

白旗山古跡  
赤松の居赤  
松村あり 是赤松家の本拠とて國心の居地也  
又日中皇

松則村の次郎と稱れ具平親王乃後方り世々攝摩の事族又  
て佐用殿赤松の居れ  
赤松系圖  
曰八世の祖傳授赤松房攝摩守りありて赤松と稱れ 先祖久能元常門尉始りて赤松と  
以て氏とれ  
赤松系圖  
曰八世の祖傳授赤松房攝摩守りありて赤松と稱れ 又久能元常門尉始りて赤松と  
赤松系圖一平或は元常五世の祖久能元常門尉始りて赤松と稱れ  
赤松系圖一平或は元常五世の祖久能元常門尉始りて赤松と稱れ 則村の風く禪教を崇め  
て國心と号れ  
赤松系圖  
年記

○國心性實大志ありて人のちれあつて歎せ元弘の亂は大塔官渡良親王より  
朝敵退治の令有と稱りて凡の國心大と歎び奉國菩提山と稱れ  
を奉りて其分者余ん松坂山の里ニテ石に圍と居山陽山法の兩道と塞  
きタレハ西國の石止つて圍との勢上治とるをたどりたり  
兵を松坂山に拒めて二十余人捕へて其の首を斬りて  
其功を歎後攝摩の守護職と稱れ  
攝摩の守護職と稱れ  
兵と率ひる氏に從ひ官軍と山崎より松坂山に圍と居  
軍と發し  
正平八年又率以法雲寺と稱れ  
氏範

則村の志は功名富貴の事ありて忠義の事ありては子孫皆  
これに歎いし事ありて不義の事ありては心むる事あり

苔繩古城

赤穂郡佐用の夜苦繩村あり

百濟僧惠便古跡

欽明天皇の御弓削守屋佛法と云

百濟僧の傳惠便慈物と攝摩の流凡二悟矣神の興は三年居後以後遷居  
焉右次即元次即といふ守屋記して百入と云又悟と如といふ峯相記に  
今日平紀と撰どるは惠便の攝摩に居るは其時佛法は流布せ  
凡門と人のる故せざる以て迎都又漢と云る者之とあり守屋記と流布  
と云ふはあり凡馬と云ふを尋ひ出と降と云ふは敏達十三年にあり  
守屋記といふ其後八年用明天皇二年とあり守屋記といふを尋ひて惠便  
され降るより凡惠便の百餘より来るは中津の元年守屋記に望年  
あり惠便攝摩に居るは付惠便といふ日本と来るは惠便と右次即惠便と

所名

大聖寺

安室御ふあり跡あり赤は長久寺長伊豆の事後と云

舟坂山

山の極摩依志美惟 并 備後三郎高德墓

元次即といふ皆年代を考ふるは之れ一々時惠便といふ遺俗と云る傳の  
今一人ありこれと惠便と誤りたるや今川崎の里信は右次といふ元次  
あり之れと云信あり

舟坂山 山の極摩依志美惟 并 備後三郎高德墓  
國書に云く赤は長久寺長伊豆の事後と云

舟坂山 山の極摩依志美惟 并 備後三郎高德墓

舟坂山 山の極摩依志美惟 并 備後三郎高德墓

舟坂山 山の極摩依志美惟 并 備後三郎高德墓

舟坂山 山の極摩依志美惟 并 備後三郎高德墓

天眞室句蹟

時水無花

と天文字は書附より自上 睿覽よりて龍教跡に蕭くといふなり

後遂又正成が力よりて遷奉ありたりしに城王の踐害に據ると  
 ありしと危難の謀略をなして城を遷らしめ終に其とにぬると正成  
 の忠義を以て書つる人。延元二年新田義貞兵と舟坂を進めて  
 合戦ありし事其に本記を見んより  
ま本に 風と書し三白波とよそ人みふる城とて見んその中しき 法んちん

播磨名所巡覽圖會卷之五之尾

秦石田之彙輯西播名勝也  
 源亭西遊其山水寺刹了  
 関之兩以雪生亭六学矣既  
 還渾言備次編為一帙為関  
 凡一百頁遂併授之割刷  
 氏云史之有人進士意之所適



山水其甚焉而山水之所以  
愛在位置向背濃淡瀟灑之  
中矣位不正濃淡死可狀非  
年可狀之無以可狀無其  
焉而畫之所以畫者存之  
墨直疑之問矣今西持山水

之尤者而狀之于隨拙之畫  
其不其固也而所謂日墨毫  
髮時之者之畫之汨沒于刻  
刷之手矣其復有畫乎哉其  
仙乎乎哉言人通士各觀乎  
初書乘除于其間可也

享和三年癸亥春三月  
浪華藍江中直跋



*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

五ノ四三

名所記総目録 浪華心齋橋通 唐物町書林 河内屋大助梓行

平安秋里羅高輯

五畿内名所圖會 全部三冊

都名所圖會 全部六冊

大和名所圖會 全部七冊

和泉名所圖會 全部四冊

都拾遺名處名所 全部五冊

河内名所圖會 全部六冊

摂津名所圖會 全部三冊

東海道名所圖會 全部六冊

本曾路名所圖會 全部七冊

伊勢路名所圖會 全部六冊

*[Small handwritten notes and seals at the bottom of the page]*



日本風土記 全部九冊

増補 大日本國花萬葉記 全部三冊  
新板 箱入近刻

難波丸綱目 全部七冊

攝州名跡志 全部廿冊

泉州志 全部六冊

長崎記行 水戸藩主先生  
の記名而旧法全一  
をまとり

東國名勝志 全部五冊

東レ記行 全部五冊

西國船政記 西國船政を全五の巻  
に分ちて記述し  
毎年法皇道の元  
分りくまらん

都レたの巻 全部五十冊

此書は全五の巻に分ちて都府の地を記し、  
其先主の治世の行状を記し、  
旧法に記し、  
堂に記し、  
所用は其外に記し、  
大坂市中に記し、  
商人に記し、  
地名に記し、  
此書は都府の地を記し、  
中にも記し、  
國に記し、

任君名勝圖會 全部十五冊

勝地山水奇観 浪華旭江縮圖 前後各四冊

攝津名所圖會 全部十冊

東海乃又十二次社社傳圖名所旧法に記し、  
し、  
の、  
の、

難波子丸 維新中 拾五冊  
大坂市中に記し、  
集りて記し、

